

## 鴨川等に係る意見発表について

公募メンバーの皆さまにおかれましては、平成30年3月31日をもって任期満了となります。

つきましては、以下のとおり意見発表の場を設けさせていただきますので、御準備についてよろしくお願いいたします。

### 〈意見の内容〉

○鴨川・高野川に係る内容で、河川区域内に限らず流域全体を含む、河川を巡る自然環境（動植物の生態）、生活環境（水質、景観、河川空間の快適利用）、災害発生の防止（流域全体での治水）、流水の利用など、幅広い分野にわたるものを意見発表の範囲とします。

○意見発表いただいたものは、京都府の施策の参考にさせていただきます。また、今後の鴨川府民会議の議題とさせていただくこともあります。

### 〈意見発表の留意点〉

○意見発表は、会議の時間の都合もあり、一人5分以内でお願いいたします。

○第40回鴨川府民会議の際に意見発表を行っていただきます。

○意見発表の順番は、名簿の順番とします。

第40回（平成30年3月26日予定）

公募メンバー（井上和彦、北野大輔、小辻寿規、小林明音、小林慧人

西山直美、早川八須彦、藤井小十郎、宮下勲、山中香奈

（敬称略）

○意見発表は、別添の意見発表様式のとおり行っていただきます。意見発表様式は後日メールで送付させていただきます。平成30年2月16日（金）までにご記入の上、事務局へメールでの提出をお願いいたします。

[郵送]

〒602-8570

京都市上京区下立売通新町西入

京都府建設交通部河川課（鴨川府民会議事務局）

[メール]

[kasen@pref.kyoto.lg.jp](mailto:kasen@pref.kyoto.lg.jp)

意見発表様式

氏名	井上 和彦
テーマ	鴨川を学びの場に
意見	<p>鴨川についてみんなで考え、鴨川に関するハードやソフトをより良くしようとするなら、鴨川についてもう少し広い機会で、多様な人に知ってもらったり、意見をもらったり、具体的な行動をしてもらうなど、関わりを深めてもらうことが大切だと思います。</p> <p>また、鴨川に関するテーマは多様で、自然環境、生活環境、防災、水利用などの他、観光、産業、文化、スポーツ、地域コミュニティ、教育など広げればきりがありません。</p> <p>そこで、鴨川をゆるやかな「学びの場」として活用できるよう、多様な主体に促すことは考えられないでしょうか？鴨川は、上流から下流まで様々な環境があり、川沿い周辺には学習施設も多くあります。多様な機関・団体・学校等が企画・実施し、講座やフィールドワーク、展示会や発表会など様々な学びが各所で展開され、人々は気になったテーマで、都合の良い時間や場所に出かけ、鴨川や鴨川に関する様々な知識や情報を得たり、活動に参加できるようにしたいと思います。</p> <p>可能なら、そのような情報をまとめて発信したり、全体をコーディネートする機能があればいいかもしれませんが、簡単ではないかもしれません。しかし、鴨川が多様な機能を持ち、人々にとって多様な関わり方があるとするならば、より広範なテーマについて、鴨川という切り口で語られなければ全体像が見えず、何らかの取組に対しても、あるテーマでは良くて別の見方では悪くなるということが生じると思います。</p> <p>まずは鴨川府民会議でも、より広いテーマで情報交換をしていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。</p>

意見発表様式

氏名	北野 大輔 (滋賀県立大学大学院)
テーマ	鴨川での生育が確認された特定外来生物オオバナミズキンバイについて
意見	<p><b>現状</b></p> <p>オオバナミズキンバイは北米原産の水生植物であり、外来生物法において特定外来生物に指定されている。水陸両性であり繁殖力が非常に強く、滋賀県では水面にマット状に繁茂した本種による航行障害や漁具への絡みつきといった被害が発生している。また、水質や水産資源への影響も懸念されている。分散能力も高く茎や葉の断片からも再生できるため、下流部への拡散および非人為的な要因（鳥類によって運搬されてしまうなど）による上流部への分布拡大が起こる可能性がある。</p> <p>2017年9月2日、勸進橋下流部の鴨川で開催された水生生物の観察会において、オオバナミズキンバイの生育が確認された。確認された群落は規模が小さく、定着してからあまり時間がたっていないものとみられた。しかし、上流部からの葉の流下がみられており、より上流部にも生息している恐れがある。加えて、今回生息が確認された地点以外においても本種が生息しているとの報告がある。</p> <p><b>対策案</b></p> <p>【1】生息状況の詳細な把握</p> <p>本種が大繁茂してしまうと人力での駆除は不可能となり、重機を用いた駆除が必要になる。したがって、群落の規模が小さい侵入初期における駆除が効果的であるとされていることから、定期的なモニタリングによる生息状況の把握が必要である。本種は非人為的な要因でも分布を拡大させることができるうえ、駆除を行った後に再生している可能性もある。また、河川改修の工事によって拡散してしまうことも考えられるため、常にその生息状況を把握し分布拡大の防止を図ることが求められる。</p> <p>【2】周辺住民への啓発</p> <p>上記のとおり、本種を効率よく駆除するためには早期発見が必要不可欠であるため、多くの人々が本種についての知識を持っている状況が望ましい。よって、周辺住民への啓発を行い、情報の提供による早期発見が可能な状況を作るとともに、本種の人為的な移動による分布拡大を防止することが重要となるだろう。</p>

意見発表様式

氏名	小辻寿規
テーマ	鴨川の治水と外来生物について
意見	<p>1. 鴨川の脅威</p> <p>近年異常気象が続いており、現状の治水対策で十分なのかと常日頃考えております。特に私自身、鴨川の岸に住んでおり大雨の際に川を渡る際などは度々脅威を感じております。特に私自身、祖父母から鴨川や高野川の氾濫の話子ども頃から聞かされて育ってきたことも影響しているのかも知れませんが、馬や牛などが流されたという当時の話を思い出すたびに小さな子どもを持つ親としては心配でなりません。昭和 10 年の洪水の話によれば、下鴨一帯が一面水浸しになったために市の中心部が助かった（鴨川水害史（1）、中島暢太郎、1983）といったものもあるようです。平安時代には鴨川の水防のために官職防鴨河使（ぼうかし）が置かれていたこと、百鍊抄には安貞 2 年（1228 年）に四条の橋と五条の橋が洪水で流出したことから分かるように先人たちも常に鴨川の脅威とも対峙してきたと認識しております。</p> <p>2. 鴨川の人々の安心安全（治水）</p> <p>現在、建設交通部河川課をはじめとする府職員の皆様や土木関連の会社の皆様等の力により、昭和 10 年以降は大きな被害は出ていませんが、命を任せる治水に対して府民がそれぞれ考えていかなければならないと考えております。安心安全のためには中州の掘削もどこまで掘れば安全なのか（完全に安全ということはないですが、どのレベルまでの洪水なら耐えられるかなど）しっかりと明示していただきたいと思います。その上で、自然環境や生活環境をどのように維持していくのかを議論していくことが重要などではないでしょうか。</p> <p>3. 鴨川の動物の安心安全（外来生物）</p> <p>最近では少し下火にはなってきましたがかつてヌートリアが多数目撃されたように外来種が多数いることは日本固有の動物たちに対して脅威だと考えております。もちろん、動物が勝手にやってくるわけではなく、基本的には誰か人が持ち込んでいるわけです。オオサンショウウオのようにならないよう、鴨川への飼育放棄への厳罰化を検討していただければと考えております。</p>

## 意見発表様式

氏名	小林明音（こばやしあかね） （PI-produce 主宰、NPO 京都景観フォーラム事務局長、七條大橋をキレイにする会共同代表 他）
テーマ	鴨川と景観
意見	<p>『鴨川景観を良いものとして次世代へ引き継ぐ場としての期待』</p> <p>私は、公共空間が市民に愛され、大切にされていくことを後押しできるような活動に興味を持っています。そのため、市民が自分たちのもの、と思えるような公共空間を目指し、自分にできることを実践しているつもりです。</p> <p>私が鴨川に興味を持ち始めたのは、七條大橋が 100 年を迎えることを知った 2011 年ごろからです。鴨川に架かる橋の景観をどう考えるか、所属している京都景観フォーラムではフィールドワークやアンケートなどを行った結果、道だから、川だから、ということではなく、鴨川を取り巻く環境全体で景観としてとらえていることが分かりました。また、その鴨川を取り巻く環境は、エリアごとによって変わっていくことにも興味を持ちました。</p> <p>私は、2015 年 7 月に地元の方と七條大橋をキレイにする会を立ち上げ、毎月 7 日に七條大橋とその周辺の清掃活動を行っています。第 1 回は 12 名で始まったこの活動は、昨年 11 月にのべ参加数 1000 人を超え、今では毎月約 60 名の方が来て下さいます。私は、この活動をとおして、七條大橋の持つ文化的・景観的価値を広めるだけでなく、住民・市民が「公共空間」とどのようにかわるかという課題を投げかけています。</p> <p>活動を続けてみて、私は、公共空間に関わる市民活動の意義は、行政では実現できない部分を担う、という点にもあると思いました。私たちが清掃活動やライトアップなどのイベントを実施するため、橋を管理する京都市（東部土木事務所、橋りょう健全課、文化財保護課など）、橋が位置する東山区役所と下京区役所、鴨川を管理する京都府（京都土木事務所、河川課）や、活動を支援して下さる京の七夕実行委員会（京都市 MICE、京都府産業観光）など、様々な行政窓口の方にお世話になっていますが、各部署の業務内だけではできないことが実現でき、その結果、七條大橋の文化的価値も認知され、国の有形登録文化財への手続きも始まりました。こういった動きを見ると、利害関係を横につなぐ市民活動だからこそ、支援や共感の輪が広がりやすいのではないか、とも思います。</p> <p>鴨川府民会議には、市民公募委員として今回で 2 期目、4 年間参加させていただきましたが、多分野の専門家の方々が同じテーブルにつき、鴨川を良くしようという共有テーマのもと、意見が出されていく場があることに大変希望を持たせていただけました。先輩方の活動にも大変刺激を受け、私も次世代へつなぐ一助を担えたらと思っています。これからも、府民の意見を積極的に取り入れ、活用されていくような河川行政を期待しています。</p>

意見発表様式

氏名	小林慧人
テーマ	流域住民と河川環境を考慮した川づくりに向けて
意見	<p>私が鴨川府民会議で意見したいことは、流域住民と河川環境を考慮した川づくりを進めていくべきだということです。</p> <p>平成9年に改正された河川法では、河川を管理する上で、「治水・利水・環境」の3つをバランスよく考えることが求められています。私たちの命・生活に関わる「治水・利水」が優先的に考えられる一方で、「環境」は後回しになりがちです。こうした現状の中で、いかに「環境」のことも考えて河川管理をするか、管理者側には工夫の余地があり、将来、重要な課題になると考えます。</p> <p>「治水」のみならず「環境」のことも同時に考えた流域住民参加型の取り組みとして、同じ淀川水系の一級河川・木津川にて、2015 年秋・2017 年秋に行われた事例をご存知でしょうか。伝統工法の竹蛇籠水作り・中聖牛作りと設置が、数百人もの流域住民と河川行政、専門家、職人などの協働作業で行われました。木津川ならではの河床低下などの治水上の問題、生物相の単純化という環境の問題に対する解決策として、流域の樹木や竹といった有り余った天然資源を用いるという流域住民主導の工夫がなされました。</p> <p>この例のように、流域住民とともに流域のものを用いて「環境」を考慮した川づくりの試みを重ねていくことで、近年の「行政に押し付けられた川の管理」から「流域住民による川の管理」という本来あるべき姿に近づくのではないかと思います。鴨川で抱える課題に対し、鴨川の由緒ある歴史・文化に学ぶことで、どのような天然資源を用いるべきか、流域にすむ人ならではのアイデアが出てくると思います。</p> <p>鴨川は日本で有数の外国人観光客にも親しみのある川です。鴨川での川づくりの取り組みは、世界に向けた、「日本の川では、住民と行政がともに環境をも考慮して川づくりをしている」というメッセージの発信につながると考えます。</p> <p>流域住民、特に将来を担う世代を交えて、話し合っていくべきテーマではないでしょうか。</p>

氏名	西山 直美
テーマ	ただの「川」を「わたしたちの鴨川」にする『川育（かわいく）』の充実を提案
意見	<p>「京都」＝「鴨川」という図式は、情報番組のお天気カメラやドラマの舞台で目にすることも多いので広く浸透している。しかし、「鴨川」＝「京都の素晴らしい財産」という意識は、人々の中でどれだけ育っているのだろうか。先人は「鴨川」を「京都の素晴らしい財産」として大切に守り、育ててきた。その思いは、大人が教え込むのではなく、子どもが、「川」で遊び、「川」で学ぶことで生まれ、伝えられていった。つまり、「川」で遊び、「川」で学ぶ『川育（かわいく）』を充実させることが、「鴨川」を、ただの「川」から「わたしたちの鴨川」にさせる近道ではないかと考える。</p> <p>「鴨川」は、子ども達にとって素晴らしい「遊び場」であり「学び場」である。魚あり、野鳥あり、昆虫あり、植物あり、石あり、文化あり・・・子ども達の関心のモトが詰まっている。さらにいえば、子どもが百人いれば百通りの“学び”が生まれる、無数の“可能性”に満ちた場所なのだ。</p> <p>「鴨川」と「鴨川」を守り育ててきた先人の思いを未来に引き継ぐために、私は子どもも親も先生も一緒に「鴨川」で遊び、学べる『川育』の充実をここに提案したい。</p> <p><b>くらしの中で、無料で、人と「鴨川」とが出合える機会を増やす</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 総合庁舎のロビーや図書館など一般的に人が多く利用する場所に、「鴨川」にすむ生き物をいれた“鴨川水槽”や冊子「わたしたちの鴨川」、「鴨川探検隊」案内などを置いてみるのはいかがでしょうか。ただの待ち時間や空間が、「鴨川」との出合いの時間や場所となる。</li> <li>・ 「府民だより」や「市民だより」に、「鴨川」に関するコラム（テーマ例：歴史・文化・野鳥・魚・森林・防災・教育など）をリレーで連載してはいかがでしょうか。土木事務所の「鴨川真発見記」というﾌﾞｸﾞも活用できる。人と「鴨川」との出合いは“文字”や“写真”でも可能である。</li> </ul> <p><b>「鴨川」が「学び場」であることを、家庭や学校にアピールする</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「鴨川探検隊」は、四季に合わせて、年に4回ほど活動している。しかし、継続して参加する人は多くない。「鴨川体験隊」にはなっていないか。「探検隊」を増やすためには、まず継続した活動目標や発表の場が必要だと考える。</li> </ul> <p>何かをしたい子どもと何かをさせたい親は大勢いる。既存の「探検隊」の内容をより充実させ、京都の『川育』のモデルケースとして活動をしてはどうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5年社会教科書にある「鴨川を美しくする会」の活動や土木事務所主催の「鴨川探検隊」の活動を学校の先生に実際に体験してもらうことはできないか。「百聞は一見に如かず」という。「学校の先生」にも「鴨川」を学べる研修の機会があれば、学校教育における『川育』の充実につながるはず。</li> </ul> <p style="text-align: right;">以上</p>

意見発表様式

氏名	早川 八須彦
テーマ	鴨川流域の植物維持管理の今後について
意見	<p>私は、IT関連の事業社であり、2014年7月～2016年6月の二年間に鴨川ライオンズクラブで環境保全委員長を拝命いただいております。その二年間で学んだ一つ「半木の道の紅しだれ桜」の寿命を考えると、維持管理の今後を心配します。そのことを課題とし本日発表させていただきます。</p> <p>育成管理の内容を皆様にご理解いただき、今後、鴨川流域ネットワーク様と鴨川ライオンズクラブが役割を明確にし「半木の道の紅しだれ桜」が花回廊として晴れやかに継続できる最適な体制にしていく必要があります。</p> <p>■半木の道の紅しだれ桜の寿命はピークを越えている？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ソメイヨシノや紅八重枝垂桜は栽培品種に当たり短命で50年～60年といわれています。半木の道の枝垂桜は植樹開始20年～40年に著しく衰退し、何本も植替えされました。</li> <li>植樹された時すでに10才の木だとすれば当時30才～40才位だったこととなります。現在の枝垂桜も50年前に10才の木を植えたとすれば古い木で60才以上となります。本来ならすでにピークを越えていることとなります。</li> </ul> <p>■一本一本を毎週のようにチェックして健康状態を把握しています。生育不足には概ね下記の原因がありチェックします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>環境面→①周辺樹木による日照不足。②土壤が痩せている。</li> <li>後天的ストレス面→①病気害虫、②天候、③乾燥</li> </ul> <p>生き物なので一本一本の生育には違いがあります。その一本一本の過去データをしっかり管理し最適な処置を施すことが重要です。いつ植樹した桜が現在どうなっているか。その土壤の過去データ、周辺状況、その年の気候などをチェックします。</p> <p>■寿命を延ばすための処置について。</p> <p>除草、低木管理、害虫駆除や土壤改良、施肥、灌水管理、剪定と防腐剤等の塗布など手入れをちゃんとする事で寿命を延ばすことができます。それにかかる費用は年間で約200万円～400万円かかっています。</p> <p>■今後の役割について、</p> <p>基本、個別の育成管理は鴨川ライオンズクラブが運用していますが、中、長期的な計画をするのは何処で、不足するであろう費用の補てん方法を含め、この機会に最適な組織に成る様に考えていかなければならないと思います。</p>



氏名	藤井のけい
テーマ	花鳥風月の <del>田舎</del> <sup>想</sup> い...
意見	<p>京都を代表する山紫水明が鴨川          永い年月には大洪水に幾度となく氾濫を          繰り返す。その都度官民一体となり先人は治水に          ご尽力され安全安心で今の「山紫水明」が鴨川          のスタイルが出来た。おじい          この景観を私達も守り続けなければならぬ。</p> <p>○治水 百年の計と称し、既存する木野川には          土砂等に満杯で、これを取り除き、次の大洪水          に耐えらる処を造るべき。          幹線道路下に大容量の貯水ホールを造る。</p> <p>○景観・美的環境 堤の大橋(現正)堤公園化          (土正) 橋よりの眺め、国内外の観光客等に          癒しの場所として世界に誇れる川は京の景観!!</p> <p>○野鳥 中野の問題 街中にもは出来、限らず          沢山の方から、美的環境に繋る。          京都は盆地、周囲は自然環境が整った。          支障無...</p> <p>○堰止は魚と居る。魚の保護のための遊大橋築          作、★新橋合流の桂川(遊大橋) 参考に。          構造物はこの周囲に配慮して作るべき。</p> <p>☆綺麗なおとりにごみは捨てる難い。(人の心理)          民のモラル。子供の頃から教育を指導せよ!!</p>

氏名	宮下 勲
テーマ	鴨川生息物（水中生物、昆虫、鳥、魚類）のさらなる環境改善の取り組み
意見	<p>私は「鴨川生息物（昆虫（ホタル・トンボ・水生昆虫）、水鳥、川魚）の環境改善」という課題を掲げて第5期鴨川府民会議のメンバーに応募し2年間活動してきました。</p> <p>この間現地学習や会議での議論を通じて、鴨川の歴史や現状と課題をいろいろの観点から学習し認識を深められたと思いますが、それと同時に想像以上に生態系の保全が簡単なことでないことを再認識しました。</p> <p>鴨川は観光都市のど真ん中を流れる自然河川であり、古来より庶民の生活とは密接につながり、現在に至ってきました。白河法皇に采配出来なかった一つが鴨川の流れといわれるように、市民生活の水害被害への総合治水対策がまず最優先にされるべきと思いますが、それは生態系を破壊してしまうことにもつながります。</p> <p>鴨川府民会議でも治水対策としての中州、寄州撤去とそれによる生態系の破損の危惧とが対立し両立のむつかしさが課題として熱く議論されているところです。</p> <p>しかしなんとしてでもこれらが両立できる対策を長期的視点で構築し取り組んでいくことが肝要かと思います。</p> <p>そこで私の現状認識と意見を記述します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 最低必要限度の流水能力の確保       <ol style="list-style-type: none"> <li>1.1 全域の計画流量(H22年)の引き続きの再調査と課題の認識共有。</li> <li>1.2 鴨川上流、下流または流入河川、さらに上流森林なども視野に入れた現状と課題認識。</li> <li>1.3 中州形成の土砂流出の原因追及と対策。</li> </ol> </li> <li>2. 鴨川生態系の総合的把握と認識の共有。       <ol style="list-style-type: none"> <li>2.1 鴨川漁業、ホタル育成、野鳥保護などの各団体のほか大学や、学者との連携を深め「生態保護プロジェクト」を編成し総合的に鴨川生態系の現状と課題の共有認識のもと目標設定。</li> <li>2.2 他府県の先例に学ぶ。</li> <li>2.3 生態系保護に対する国、府、市行政内での横断的取り組み状況の総合的把握。</li> <li>2.4 鴨川生態系の広報活動強化。（観察会、図鑑看板、ネット広報）</li> </ol> </li> </ol> <p>これらは現在取り組まれている内容ですが、府民会議での議論を見て感じることは公共機関（市・府）と生態系保護団体や一般市民との思いや認識がまだ具体的な共通認識として深まっていないと感じます。</p> <p>河川対策と生態系保護の課題と認識をまず共通化する事。そしてその対策をお互いの共通目標に具体化して取り組んでいくことが肝心かと思います。これは短期にできる事ではなく 時間をかけて長期的に取り組むテーマかと思います。</p> <p>私の夢は 鴨川にホタルが乱舞し、オイカワやアユが跳ねている。いつかこんな鴨川が見られることを期待しています。</p>

## 意見発表様式

氏名	山中 香奈
テーマ	鴨川流域における教育の多様化
意見	<p>意見を述べるに先立ち、公募メンバーとして学生の身で、鴨川をはじめ京都府の諸活動を学ぶ貴重な機会をいただけたことに、まず感謝したいと思います。</p> <p>学生の多いことで知られる京都のまちですが、その流動性などから、地域や実際の施策には意見が反映されにくい立場というのが現状です。またそれは同時に、学生期間という特別なひと時を過ごす地を京都に得た人々が、その力を還元出来る仕組みの不足でもあります。</p> <p>そのひとつの打開策として、私が提案させていただきたいのが、多様な鴨川教育プログラムです。現在、鴨川では水生生物や鳥類等と触れ合う「鴨川たんけん、大発見」が定期的に催されており、参加者も多く満足度の高い良質な教育の機会となっています。また、このプログラムは長期的に見た時、将来の京都府を担う子ども達の、地域への深い理解と愛情を育むという効果も期待出来ます。</p> <p>そこでこの例に習い、複合資源として鴨川を捉え直し、その魅力をより多角的に学べる場を設けていくことは出来ないでしょうか？私は建築とまちづくりを主に学んで来たこともあり、鴨川についても、その橋の構造や川べりの都市形成、住宅形式等に目を奪われました。特に、川床はその用の美に飽かず眺めてしまうほどで、その可能性には並々ならぬものを感じています。このように、鴨川の魅力は本来多角的で多様な姿をしており、それを伝える道はまだまだ、途上にあると感じています。鴨川の捉え方を違えて見るだけでも、また新たな子ども達や住民の方々との関係を構築できるかもしれません。</p> <p>合わせて、京都府には幸い、ありとあらゆる学問を学ぶ学生が居り、その学びを活かし伝えていく場を求めています。鴨川を通じて、こうした学生達による多様な視点と子ども達や地域のひとびとの興味関心が出会うことができれば、京都府はもっとずっと豊かな展開を見せて行くのではないのでしょうか？そして同時に、活動の多様化が進むことで、学生達と京都府との今後の関係性もより親密になって行くのではないかと期待し、意見とさせていただきます。</p>